

『毛沢東と中国』

終りなき革命——(上・下)

スタンレー・カーノウ
風間 龍・中原康二 著
訳

激烈な歴史的ドラマを再現

中国共産党の十全大会(七三年八月)で毛・周体制が固まったかに報じられた矢先、中国ではこの大会前後から「孔子批判・始皇帝評価」のイデオロギー・キャンペーンが始まり、このころそれがにわか激しくなっている。

「失敗の種子」

では、このキャンペーンは一体、なにを意味するのであろうか。周恩来は、十全大会の政治報告で、激しく林彪の罪状を糾弾しながら、「二つの路線の闘争」がまだおわっていないことを強調して、これから先も「林彪與変」が「十回、二十回、三十回とくりかえされるであろう」と力説していたが、「孔子批判・始皇帝評価」の一環として、孔子に殺されたという論敵・少正卯がこのころしきりに称讃されていることを、先の十

全大会の王洪文報告が含む林彪追悼とも思われる一節と重ねあわせてみると、事態は思いがけない方向——「周恩来批判」へと発展してゆく芽をもっているのかもしれない。いずれにせ

書評



蘇王高湯こけし
—山形県南村山郡羅王温泉—
『日本郷土玩具事典』(岩崎美術社)より

よ、今日の中国はこうしてなお「復権と反復権の闘争」、「二つの路線の闘争」をつづけねばならないのである。その意味で文化大革命は、「終りなき革命」を中国の政治過程のなかに定着させてしまったといえるが、しかし、文化大革命

成功した一大ドキュメントであり、同時に文化大革命によってさえも、「そう簡単には支配者層の言いなりにならないのである。私はいく最近も、日本を助れた氏と話し合ったばかりであるが、文化大革命については、あまりにも数多くの意見や評価が

交錯している反面、その全体像が記録されていないことに気づいた著者は、なによりもまず、その全体像の描写はいかにして可能かを検証しようと思いついたのであった。たまたま、ジョン・K・フェアバンク教授の率いるハーバード大学の東アジア研究センターが著者のこの野心的な試みを同センターの研究プロジェクトのなかに組み入れて支援することとなり、著者はこうして文革期中国についての分析のメッカであった香港のアメリカ総領事館に集められた資料や情報をふんだんに利用し、さらに著者の取材活動の拠点であった香港で著者自身が取材した資料や情報のすべてを的確に処理して本書は成ったのである。そのような材料の積み重ねによる実証的でしかも迫力に満ちた記述によって、文化大革命の諸断面と全過程が余すところなく本書には網羅されている。

熱狂と夢と傷多き残像

このような書であるだけに、著者は本書のなかで、文化大革命を観念的に定義づけたり、批

行、ローマ銀行、クレディ・リ
オネ、UBAF(アラブ・仏合
弁オイル・ダラー銀行)である。

さらに一〇月末には、現在就
航中では世界最大のVLCGと
なる四八万四〇〇〇トンのグロブ
ティック・ロンドン号が石川島播
磨重工から買主インド人海運王
のラビ・ティツコウ氏(四一歳)
に引き渡された。同船は今年二
月に完成した同型グロブティク
・トーキョウ号の姉妹船だが、
この二隻の建造費五〇〇〇万
以上と推定される巨額な信用を
アレンジしたのは、ロンドンの
名門マーチャント・バンカーの
ウィリアム・フランツ社である。

だが、実際に資金を供与した
のは、同社の一〇〇%株主であ
るナショナル&グリンドレー銀
行とその株式四〇%を支配する
米国のFNCB、そしてわが国
の三井物産であった。

このように、このところこの
新規成長分野に対する米国大銀
行の食い込みが目だっている。
もともと船舶ローンは、スカン
ジナビアと関連が深いハンプロ
ス銀行を別とすれば、大銀行の
関心外にあった。しかしいまで

は、コンチネンタル・イリノ
イ、ウェルズ・ファアゴ、チェ
イス、バンカーズ・トラスト、
バンク・オブ・ホストン、MH
Tなどの米国大銀行が目白押し
に参入し、さらにヒル・サミュ
エル、エドワード・ペイツ、ロ
スチャイルド、クリップス・ウ
ォーバークなど英系マーチャー
ント・バンカーも進出して、にわ
かに乱戦模様となってきた。そ
して富士銀行とタイアップして
いるはずのFNCBが、船舶建
造にノウ・ハウをもつ第一勲銀
グループに色目をつかうような
状況で、いまやこの市場は、世
界中の有力バンカーがこぞって
着目する有望市場である。

バンカーからの変身

以上、現在のユーロ中期市場
を需要面からささえる四つの柱
について展望を行なってきたが
需要面からみる限り、ユーロ信
用市場の縮小など考えられない
状況である。そこから得られる
強い印象は、この市場がきわめ
て変化に富む弾力的な市場であ
ると同時に、いまやこの最大の
市場を支配しつつある巨大な多

国籍銀行が、ますます数世紀前
のマーチャント・アドベンチャ
ラー(冒險商人)に、似てきた
という事実である。

そもそも、まだ海底深く眠っ
ている石油をかたにして一〇億
もの金額を貸し付けたり、近
い将来船舶過剰による市況反落
が確実視されている海運業者に
一件一億以上の長期融資を未
来の運賃収入をあてにして供与
したり、返済能力に疑問符がつ
けられている開発途上国に、一
〇〇億もの長期ローンを固定
させたりするようなビヘイビア
は、一〇年前にはまったく予見
できなかったことである。

それがいまは、プロジェクト
の大型化に伴う必然的な発展と
して、肯定的にとらえられてい
る。巨大化した強力な多国籍銀
行がシンジケートをくんで危険
分散、というより危険の相互押
しつけを行なっている限り、当
面は大きな破綻は起こりそうに
ない。それを貫く流れは、商業
銀行業務から投資銀行業務、さ
らに総合金融サービス業務への
展開であり、いわばバンカーか
らプロジェクト・マネージャー

への変身である。

このような壮大な一大変革が
国際信用市場の表舞台で進行中
の七三年一〇月、一つの事件が
発生した。米国第八三位資産額
九億、余のカリフォルニア州サ
ンディエゴのUS・ナショナル
銀行の倒産である。これは、一
九三〇年以来最大の銀行倒産だ
が、ショックは僅少ですんだ。

ル(パークレイズの子会社)な
どがまきぞえをくらっている。
これら英系バンカーは、FRB
の責任者と急機会見して、債権
の確保(四行で三四〇万)を
を交渉しているという。
短期借りの長期貸しへのところ
がし操作が二〇〇億もの巨大
規模の国際信用市場と直結して
いるユーロ中期貸付け市場にお
いて、将来サンディエゴ型小
キャンダルがより拡大された規
模で再現しないように、現代の
バンカー・アドベンチャラーは
神に祈るべきではあるまいか。



増資完了ご挨拶

株主各位
昭和48年12月1日
東京都板橋区富士見町4番地
内田油圧株式会社
取締役社長 内田 泰男

このたびの当社新株式発行にあたりましては株主各位
の絶大なご協力と、ご支援によりまして、11月30日全額
の払込みを完了し、12月1日付をもって

発行済株式総数 1,200万株
資本金 6億円

となりました、ここに謹んでご報告申し上げますと
ともに厚くお礼申し上げます。

新株券のご送付について

新株券は12月2日よりお届け住所まで書留便にてお送
りいたしますが、万が一12月15日頃までに到着しない場
合にはお手数ですが下記までにご照会下さい。

名義書換代理人 東京都中央区京橋1丁目3番地の3 千104
事務取扱所 中央信託銀行株式会社
電話 東京(567)1451(大代表)

判したりすることを極力避けている。だが、そのかわり、文化大革命の激動のプロセスを執拗に描き出すことによって、文化大革命の熱狂と夢とその傷多き残像とが読者におのずと伝わるのであり、しかも著者は本書の最後を「毛沢東の失望の深さは彼の見果てぬ夢の次元の大きさの反映であるのであろうか」と疑問形で結ぶことによって、その判断を読者にゆだねている。

もとより、著者のこのような禁欲的な姿勢にもかかわらず、個々の断面の描写はきわめて生彩に富むものであり、たとえば、武漢事件や王光美批判の場面、陶鈞失脚のナゾを探った部分などは、著者にとってももともと情報が多かった広東省の情勢分析とともにきわめて鋭くリアルである。

本書のなかで著者は、毛沢東の巨大な夢を高く評価し、また、「文革は、中国人民に過去の彼らの硬直した考え方とはちがう平等主義の精神を植え付けた」とも語って、文革にたいする歐米人特有の情念的な幻想を著者も一方では抱いていたことを示

しているが、その文革がやがて林彪異変を生みだしたことは、著者にとっても大きな衝撃であった。

著者は林彪の事件について、「もしかしたら権力奪取を試みて失敗し、射殺されたのかも知れない」とさすがに鋭く問題点をかきつけているだけに、林彪異変の真相を含めて著者の今後の分析に期待するところもまた大きいものがある。いずれにせよ、本書によって文化大革命のほぼ全期間をとらえた著作が完成したのであり、主として英語に訳された二次資料によってさえ、これだけの仕事を成し遂げた著者の努力には敬服すべきものがある。

邦訳は上下二巻から成り、上巻の「I 毛沢東と中国」で毛沢東の生い立ちから文化大革命にいたる生涯の歩みが簡潔にわかりみられたのち、「II 革命のなかの革命」から文革の記述がはじまる。下巻は「III 爆発」、「IV 革命から反動へ」、「V 振り子は揺れる」の三章を通じて奪権闘争から九全大会、林彪異変そして対外的には米中接

近へといたるプロセスが描かれていて、とくにIII、IV章は本書のなかでも旺巻である。

邦訳は、短期間に仕上げたものであるのに、訳文も明快であり、国際共産主義運動によく通じている訳者の持ち味も出ていてすぐれた訳であるが、中国研究者もしくは欧米や香港などの中国研究に通じた専門家の協力を得ていないためか、とくに注の訳し方などには問題が多いのが残念である。

「技術と人間」

「強さの思想」に屈服

ジョルジュ・フリードマン 著
天野恒雄 訳

現代文明が人間の精神に対してどのような作用を及ぼすかという問題は、現代文明の功罪を考えるさいに、最大の関心事でなければならぬであろう。

自然的環境と

技術的環境

それは単に公害とか自然破壊といった直接に目につける影響にとどまらず、間接にしか現わ

専門的には知名の人物名が音訳のままであったり、邦訳のある著書や文献の訳出の仕方などにも工夫すべき点が残されている。また、たとえば、ハーバード大学東アジア調査センターとは一般にはいわず、やはり研究センターと訳すべきところであらう。

東京外国語大学助教授

中嶋 嶺雄

(B6判・上下七三六頁・各
一一〇〇円・時事通信社)

相場道の真髄を実戦的に解説

新株式実戦論

木佐森吉太郎著

B6・600円 110

東洋経済新報社

財産づくり・資産対策のキーポイント

株式投資30の決め手

足立真一著

B6・680円 110

東洋経済新報社